# ラサリーラー
# 愛のマンダラ
# 『バガヴァタ・プラーナ』の物語より

## 第2部

## 満月の夜

あらゆるものの神、シュリー・クリシュナは、森の中に忍び入り、木々の間を静かに動きました。とても静かに歩いたので、シカにさえも聞こえませんでした。前方にはヤムナー川が、昇っていく月の下で銀色に輝いていました。辺りはコオロギやカエルの声にあふれ、夜に香る花でむせ返るようです。クリシュナ神は立ち止まって、その音や香り、足の下の地面や小枝の感触を楽しみました。その夜、森は特に生き生きしているようでした。まるで、すべての鳥、動物、虫が見に来たかのように、たくさんの目が影からのぞいています。木々そのものも、これから起ころうとするリーラーに注目し、集中しているようです。

静かに、クリシュナ神は木々を越えて移動し、川岸に突き出ている銀白色の砂で囲まれた空き地に着きました。彼は横笛を口元に持っていくと、息を吹き込み一つのフレーズを奏でました。純粋かつ優しく、それは一瞬、夜の空気を震わせました。

村では、ゴーピーたちが夕べの仕事で忙しい中、彼女たちの中でも最も注意を怠らない者たちが聞き耳を立てました。あれはクリシュナの横笛じゃないかしら。彼女たちは再び聞き耳を立てました。何も聞こえません。最初にその音が聞こえた時、ラーダーだけが家を出ました。爪先立ちで静かに。他のゴーピーたちは家事に戻りました。野菜をかき混ぜたり、チャパーティーを延ばしたり、赤ちゃんの弟や妹を寝かしつけたり。

するとまた、聞こえました。間違いありません。神の横笛の神聖な音です。他の何にも増して、心を駆り立てる音です。

今度は村中の家で、ゴーピーたちがやっていることを投げ出しました。米は吹きこぼれ、弟や妹は母親や祖父母に預けられました。髪を振り乱し、支度も整わないまま、ゴーピーたちはサーリーをグイッとつかみ、スカーフを風になびかせて家から走り出ました。彼女たちにとってその時ただ一つ大切なことは、クリシュナといることでした。

そして、横笛の音はまだ響いていました――神秘的で、魅惑的で、約束に満ちて。ゴーピーたちは、木の根につまずき、髪の毛がとげに引っかかろうとも、クリシュナの元に一番にたどり着いて彼の愛を勝ち得ようと走りました。

彼女たちは、ヤムナー川のほとりの空き地の岩の上に座っていたクリシュナに出会いました。彼は、黄色い絹の衣に身を包み、髪にはクジャクの羽を飾り、横笛で創り出す複雑な音色に没頭していました。彼の肌は月の光の下で青く見えました。息を切らしながら、ゴーピーたちはその場に立ち止まりました。

「彼は違って見えるわ」と、一人がささやきました。

「彼は神のように見える！」と、誰かが言いました。

「彼は神よ」と、ラーダーは自分の言葉の意味を完全には理解しないまま言いました。

シュリー・クリシュナはこの戯れを観察していました。彼は、ゴーピーたちが到着すると一人一人を目で出迎え、そして皆、彼と目が合うと歓迎されていると感じました。はにかみながら、彼女たちはひと塊になり、次に何が起こるのかと待っていました。

しばし横笛を下ろし、クリシュナは腕で空中に大きな円を描き、少女たちをラサを始めるようにいざないました。すぐに、一人の勇気ある女性が一歩前に出て、踊り始めました。やがて、他の少女たちも加わりました。彼女たちは腕を上げ、喜びにくるくると回りました。クリシュナの前で、彼女たちは自由で女神のように美しいと感じました。手をたたき、彼女たちが牛飼いの王子の周りを円を描いて動き始めると、足首の飾りがチリンチリンと鳴りました。

© 2023 SYDA Foundation®. 著作権所有。